

知覚の哲学

——色彩現象を中心にして——

村田 純一

知覚経験は世界のなかの諸事物やその性質を経験する最も直接的な経験であり、世界についての知識を得る最も基本的なあり方である。他方で、知覚経験を特徴づけているのは、その対象が何であるか（「知覚内容」）、のみではなく、その対象がどのように現れているか、という対象の現れ方にかかる要因である。視覚においてはモノの見え方、聴覚においては対象の聞こえ方、触覚においては対象の感じられ方などが、感覚様相に応じた体験の特有性を示している。また、同じ感覚様相内でも、この現れ方に関する区別は大きな意味をもつ場合がある。例えば、夕日の赤と郵便ポストの赤とは、同じ赤色でも、その現れ方は異なっており、美的価値が問題になる場合などでは、その違いが決定的な意味をもつことになる。

知覚における「何」にかかる契機を認知的要因、「いかに」にかかる契機を感覚的要因と呼ぶとすると、知覚経験の固有性を作っているのは、この両者が切り離せない仕方で結びついている点にある。そして、知覚をめぐる哲学的問題、あるいはまた、心理学的问题は、この二つの要因の関係をどのように考えたらよいのかという問題に根をもっている。認知的要因を重視し、そこに知識の起源を求めれば、主知主義ないし合理主義的見方が生じるし、感覚的要因を重視し、そこに知識の起源を求めれば、感覚主義や経験主義が生じることになる。

また、二つの要因の存在論的身分をめぐって、実在と現れをめぐる問題や、第一性質と第二性質の区別の可能性をめぐる問題が生じてくる。さらには、知覚経験に特有な感覚要因はクオリアという名で呼ばれ、意識をめぐるなぞの中核を形成している。こうして、知覚をめぐる問題は、認識論から、存在論、さらには心の哲学に至るまで、伝統的哲学のなかで根本問題の発生場所であり続

けてきた。

それでは現代では知覚をめぐる議論はどうなっているだろうか。

かなり一面的な見方かもしれないが、筆者の印象では、ここで記したような基本問題の構図はあまり変わっていないように思われる。しかし他方では、現代の議論に一定の新たな特色を見出すこともできるようと思われる。

第一に、知覚を扱う多くの場合に、知覚を一般的に問題にするのではなく、例えば視覚、例えば聴覚など、一定の感覚様相をもった知覚を取り上げて、焦点を絞って問題を議論することがなされている点に特徴がみられる。そのために、例えば色彩とは何か、あるいは、音とは何か、などが重要な問題として登場することになる。これらの議論では、感覚様相に対応した対象の具体的な現れ方に光が当たられることになり、広い意味で「現象学的」観点が重要な意味をもつことになる。

第二に、具体的な仕方で感覚様相を問題にし、色彩とは何か、音とは何か、を問題にする場合、哲学者は一時代前のように自らの乏しい思考実験のみで話を済ますことはできなくなっている。これは、思考実験が決定的な限界をもっているためでもあるが、同時に、現代の科学（心理学、生理学、認知科学、など）がさまざまに新しい知見をもたらしており、それを無視できなくなっているためである。たとえば、盲視（blind sight）や変化盲（change blindness）などの知見に基づいて、これまでの「常識」からみるとほとんどありえないと考えられるような事例が活発な議論の対象となっている。

このように、自然科学の成果を考慮して哲学問題を考える姿勢はしばしば「自然主義」と呼ばれている。この意味で、現代の知覚の哲学は「自然主義」の傾向を強く示すことになる。

現象学と自然主義、一見すると相反するように思われる二つの傾向の結合が現代の知覚の哲学を特徴づけているように思われる。

筆者もこれまで、おもにこうした現代の知覚の哲学の流れに沿った仕方で問題を考えてきた。筆者が重視してきたのは、視覚経験の固有性を形成する色彩現象であり、おもに色彩現象の現象学的分析を試みてきた。同時にその際、導き手となる科学的知見として、J・J・ギブソンの生態学的アプローチを参照にしてきた。そのうえで、そうした試みを通して獲得される観点を「生態学的現

象学」と呼んできた（村田 2002、参照）。以下では、おもに色彩現象を題材にしながら生態学的現象学の観点が知覚についてどのような見方を可能にするかについて考えてみたい。

最初に、生態学的現象学の基本特徴をおもにフッサーとギブソンの知見を紹介しながら確認する。次に、色彩現象を取り上げて、この生態学的現象学の観点の特徴をさらに具体化しながら、色彩とその知覚のあり方の解明を試みる。そのうえで、視野を色彩からほかの感覚様相でとらえられる現象、特に音にまで広げて、生態学的現象学の観点の有効性を確認し、最後に、こうした検討からもたらされる存在論的帰結をごく暫定的にではあるが、考えてみたい。

1 知覚経験の構造：生態学的現象学の観点から

1.1. 射映：同一性と多様性

フッサーの知覚論のなかで最も重要な概念といえば何といつても対象の知覚的現れの本質構造を示すために使われた「射映」という概念をあげなければならないだろう。

フッサーによると、どんな事物やその性質も、必ず一定の現れ方（パースペクティヴ）のなかでとらえられ、そうした多様な現れ方を通して同じ対象として知覚されている。例えば、眼前の机は、前から、後ろから、あるいは、上から、下から、などさまざまなパースペクティヴのもとで見られるが、それらを通していつも同じ机として見られている。ここで重要なことは、それぞれの現れ方に登場する机は、二次元の像のようなものではなく、三次元の机自身である点である。換言すると、机が前から見られているときには裏側は当然見えない部分として隠れているが、まさに、机はそうした隠れている見えない部分をもった対象として現れている。

机が見られているときには、必ず見えない、現れていない部分を伴って知覚されている。この事情は、机が一定の仕方で現れているとき、その現れ方には、現れていない部分への連関が不可分な仕方で属している、と表現することもできる。フッサーはこの連関性をしばしば「(内部) 地平」と呼んでいる。地平

を伴わない現れ方は存在しないのである。

さらにここであげた多様な現れ方を具体的に展開するということは、対象をさまざまなパースペクティヴから眺めるために実際に体を動かすということにほかならない。フッサールの言い方を使うと、多様な現れ方の展開には、運動感覚の体系が対応しているのである。あるいは、メルロ=ポンティが強調したように、身体行為が不可欠なのである。

以上のような事情が、知覚経験の志向性の特徴をなしている。そしてこの知覚経験に見られる構造は、人間のような有限的存在者に限定されたものではなく、フッサールの言い方を使うと、「いかなる神といえどもこの点に関していさきかの変更も加えることはできない」(フッサール 1979, 189)。つまり、神といえども、机を知覚しようとすれば、射映構造を伴った仕方以外の仕方ではとらえることはできないのであり、この意味で、射映構造は事物存在の意味をアブリオリに構成しているということができる。またこの意味で、事物は射映を通してこれ以上直接性が考えられない仕方で「直接」現れているということができる。

フッサールはこうした観点から、いわゆる第一性質（事物自身に備わる性質）と第二性質（現れ方のみに属する性質）の区別を否定する。どんな事物に本質的に備わる性質であっても、それが事物に備わって、事物の本質契機を構成している限り、一定の現れ方を介さずには知覚されることはありえないからである。

実際フッサールは、知覚の射映構造を説明するために、しばしば音や色を対象として用いている。イデーンのなかでは音を題材にして以下のように述べている。

ヴァイオリンのある音は、その客観的同一性を保ちながらも、射映を通して与えられ、その音はその変動する現出様式をもつのである。わたしがそのヴァイオリンに近づくかあるいはそれから遠ざかるかに従って、わたしが演奏会場そのものの中にいるかあるいは閉鎖された扉を通して聞くか等々によって、その都度その音の現出様式は別様になる。それらの現出様式のうちのどれも、自分こそ絶対的に与える働きをする現出様式であると

目されることを要求する権利を持たない。(フッサー 1979, 190)

この引用文のなかでフッサーは、音のような現象も空間性を備えており、一定の距離と方向から聞こえてくるものとして記述している。そしてそれぞれの聞こえ方は、さまざまであり、例えば、演奏会場の内と外では、聞こえてくる音の大きさや鮮明さは異なるかもしれないが、それらの違いは、聞こえ方のなかに真と偽、あるいは、本物と偽物、といった区別をもちこむことを根拠づけるものではない。どれほど不鮮明な音であっても、一定のペースペクティヴのもとで聞かれたヴァイオリンの音自身であることに変わりはない。

もっとも、こうした現れ方に關しての質的區別に何の意味もないわけではない。場合によっては非常に重要な意味が与えられる場合もある。例えば、多くの場合、演奏会場の席には S 席から A、B、C、D 席といった区分がなされ、それぞれ値段がずいぶん違つて割り振られている。ヴァイオリンの音がよく聞こえる場所、あるいは、最適に聞こえる場所に關して、一定の共通了解が成立している。だからこそ、フッサーはそうした区別に關して「第二次の客觀化」ということを語り、メルロ=ポンティは「規範を巡つて変動する張力」というような言い方をするのである。例えば、メルロ=ポンティは以下のように述べている。「画廊のなかのそれぞれの絵にとってと同様、ほかのあらゆる対象にとっても、それを見るのに最適な距離というものがあり、それをより多くとらえうるような向きというものがあるのだ」(メルロ=ポンティ 1974, 146)。ただしこのような区分はあくまで一定の関心や興味などを前提にして成立するものであり、無条件に成り立つものではなく、それゆえまた、存在論的な意味をもつものではない。

最後に、射映に關して、最も重要なことを確認しておかねばならない。

先にも述べたように、射映構造は事物知覚に備わる本質性格であり、したがつて、事物知覚の志向性の本質を構成するものである。そして、志向性とは、対象が体験を超越するものとして経験される構造であるから、射映構造を通して登場する対象はつねに体験を超越した存在、つまり、体験から独立して存在するものとして知覚される。この意味で、射映構造は、知覚体験に「超越論的」性格（超越を可能にする機能）を与えるものということもできる。

フッサーはこの点を以上のような仕方で表現している。

知覚される時事物がおよそ一般に知覚を超越したものであるのと同様に、その事物の部分、側面、契機としてのその事物に属するありとあらゆるものもまた、それが第一性質と呼ばれようと第二性質と呼ばれようと、どこにおいても同じような理由によって、知覚を必然的に超越したものである。だから、見られている事物の持つ色は、原理的に、その色についての意識の、何らかの実的〔内在的〕な契機ではない。

その色は現出する。けれどもその色が現出している間に、その現出は連続的に変化することができ、また変化せざるをえず、その点は経験に徴してみれば明らかである。同一の色は、色の射映の連続的な多様に「おいて(in)」、現出するわけである。これと似たようなことは、感性的性質といったものにもあてはまり、同様にまた空間的形態のどれにもみなあてはまるのである。(フッサー 1979, 178)

以上見てきたように、フッサーの場合、知覚経験の構造という点から見るかぎり、第一性質と第二性質の間にとりたてて区別をつける理由は見つからないし、また、第二性質のなかでも特に区別が問題になることもない。

1.2. 不変項の知覚：変化を通した同一性

J・J・ギブソンの生態学的アプローチに対して、フッサーとメルロ=ポンティの現象学的知見が影響を与えたのかどうかは必ずしもはつきりしない。しかし、ギブソンが現象学的心理学者の D・カツやゲシュタルト心理学者の K・コフカなどから多くの知見を取り入れていることは、ギブソン自身がしばしばこれらの論者を参照していることから明らかである。いずれにしても、前節で見たフッサーの見解と根本的な点で一致する見方をギブソンの知覚観のなかに見出すことは困難ではない。

伝統的な知覚論では、知覚的認知は、入力として与えられる網膜像を典型例とした感覚刺激を出発点にして、それに多様な理論的仮定を加える過程（情報

処理過程) を経ることによってはじめて成立すると解される。この見方のもとでは、知覚的認知の研究はどのような感覚刺激が与えられているかを正確に見出すことから始まる。そしてそのために多くの場合、実験室で人工的に制御され、固定された状況を作つて被験者の入力データを特定することが行われる。しかしこのような人工的状況では、非常に限定された刺激しか与えられないために、それをもとに対象を特定しようとすれば、どうしても、さまざまな推論や判断が必要となると考えざるをえなくなる。ギブソンはこうした知覚観を「スナップショット」理論と呼んでいる。ギブソンが試みたのは、こうした制限され、貧弱にされた刺激にもとづく知覚(実験室内での知覚)ではなく、対象との間で多くの相互交渉のできる日常的な状況での知覚をモデルにすることである。こうした自然な知覚をもとにすると、刺激や感覚という概念が根本的に変換されることになる。

刺激は瞬間に与えられる網膜像ではなく、対象を探索しようとする運動のなかで取り出される「情報」(変化のなかの不变項)であり、感覚と呼ばれる機能も、たんに刺激を受容する機能をもつだけではなく、そうした情報を抽出するために対象と相互作用する「知覚システム」と解釈し直されることになる。

ここで重要なことは、ギブソンの場合も、フッサーの場合と同様に、知覚の対象は、さまざまに与えられる「刺激」(ないし与えられ方)ではなく、そうした多様な刺激を通して与えられる「不变項」だという点である。そしてこの不变項は、さまざまな刺激とは違ってそれ自身は対象に類似した形態などの性質を備えたものではない。

例えば、三次元の対象を特定する情報は、三次元の対象を二次元面へ投射したような現れ方(「刺激」ないし「感覚像」)ではなく、そうした現れ方を通して、それらを越えて同一性を保持しうるものである。ギブソンの言い方を使うと、「対象を特定するのは、それ自体「形態のない」(formless) 不变項なのである」(ギブソン 1985, 183) ということになる。

ギブソンはこうした知覚のあり方をとくに知覚の恒常性の分析のなかから明らかにした。

例えば、図 1(次頁)で示されているように、日常的に出会う扉はその都度大変違った姿を示している。しかし、こうした違いにもかかわらず、扉の形は

同じであり変化しないものとして知覚されている。ギブソンは、こうした形の恒常性を把握する知覚のあり方を、実験室のなかで制限され、固定された仕方で対象を知覚する場合（視覚野（visual field）の知覚）に対比して、「自然的態度における知覚」（視覚世界（visual world）の知覚）と呼び、恒常性が決して経験や知識に依存するものではないことを強調している。

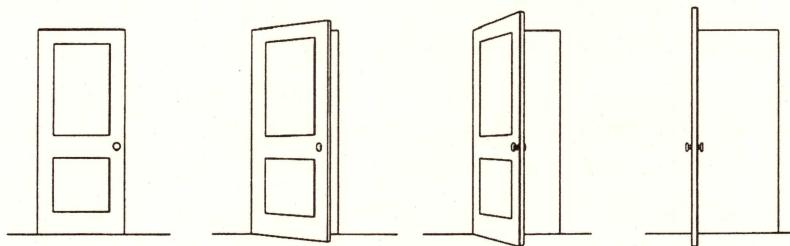


図1：(扉の) 形の恒常性 (J.J.Gibson, *The perception of the visual field*, 1950, p.179.)

とりわけ興味深いのは、コフカの考え方にもとづいて、形の恒常性を説明している点である。ギブソンによると、形の恒常性が成り立つ理由の一つは、形が常に方向性と結びついて知覚されている点にある。つまり、どんな場合も、形は一定の方向と結びついて「一定の方向にある形 (a-shape-in-a-given-orientation)」として見られているから、そうした違いを通して同じ形が把握されうるというわけである (Gibson 1950, 171)。

ギブソンがコフカから借りて用いた言い方を使うと、どんな形も「一定の方向にある形」であるように、どんな色も「一定の照明のなかで方向づけられる色」であり、また、どんな音も「一定の方向にある音」なのである。こうした様々な情報は、それぞれの媒質のなかに存在しており、具体的には、視覚の場合には照明光が満たしている媒質 (illumination field) であり、聴覚の場合には空気が満たしている場所 (vibration field) であり、嗅覚の場合には化学物質が満たしている媒質 (diffusion field) である (Gibson 1966, 11ff.)。

感覚や刺激概念を変換することを目指している生態学的アプローチにとっては、こうした媒質内の情報のあり方を適確に取り出す試み（生態学的物理学の試み）は知覚論にとって、知覚器官の解明に劣らず重要な役割を果たすことになる。

なる。生態学的光学では、環境からの反射光が安定した構造をもって満たしている照明光のあり方を「包囲光配列」とよび、包囲光がどのような仕方で環境内の対象と対応しているかが明らかにされる。音の場合には、音波が満たす媒質のなかで、音波の先端(wave front)のあり方に方向が対応し、音波の系列(wave train)のあり方によって、音源の出来事のあり方が特定されることになる。

このように媒質のあり方は感覚様相によって異なっているが、いずれにしても、媒質は、情報を内在すると同時に、そのなかで知覚者が多様な仕方で運動することができ、それによって不確定な情報から確定的な情報を取り出すことが可能となる。この点で、媒質は生態学的観点からは、知覚的認知の成立を可能にする本質的条件だということになる。

1.3 生態学的現象学のテーゼ

以上のように見ると、ギブソンの生態学的アプローチは 1.1 で取り上げた現象学的観点をいわば科学的見地から確証する試みと見ることもできる。こうして両者を結び付けることによって得られる観点、つまり生態学的現象学の観点から見られたテーゼにもとづくと、知覚とは、知覚者と環境内にある対象との相互作用によって成立する認知活動である、ということになる。

より具体的には以下のよう性格を取り出すことができる。

- ①直接性：知覚は感覚や刺激にもとづくものではなく、対象を直接的にとらえる認知活動である。
- ②身体性と行為性：この認知活動は、さまざまな身体活動を通して実現されるのである、この点で、身体性と行為的性格を知覚経験の本質的特徴と見ることができる。
- ③媒質の重要性：とりわけ際立っているのが媒質の役割である。知覚活動が実現する場として、媒質の役割が不可欠である。
- ④こうした観点を支えているのが、変化のなかの同一性という見方である。この見方によると、変化すること、あるいは、多様なあり方を示すことと、同一であることとは決して対立するのではなく、むしろ不可分に結びついているのである。ギブソンの言い方では以下のようになる。「変われば変わるほど、同じになる」(The more it changes, the more it is the same thing.) (ギブソン 1985, 79)。

2 色彩とは何か：その空間性・多次元性・恒常性

以上で見てきた生態学的現象学の観点から色彩現象の特徴を考えていくことにしよう。

2.1. 色彩の空間性

すでにこれまで見てきたように、色彩は、とりわけそれが物体の表面色である限り、どんな場合も一定の照明のもとで、一定の空間的位置をもつものとして知覚される。色彩はこのような意味でのパースペクティヴ性を常に持っていると同時に、それぞれの色は、例えば物体の色であったり、空の色であったり、あるいは炎の色であったりという具合に、色自身に固有の物体性/空間性を備えている。D・カツツはこうした色の現れ方に備わる特質を「表面色」「面色」「空間色」「光輝色」などという仕方で分類した。

どんな色も一定の環境のなかに位置を占めている限り、つまり世界のなかにある限り、こうした特質を備えている。とりわけ日常生活で最も頻繁に目にすることは物体表面を構成している表面色である。それに対して面色の方は、空の色やスペクトル色などの場合を除くと、かなり人工的な場合に見ることができるだけであるが、のちにも見るように、表面に投げかけられた影の示す特徴は面色的な性格であり、表面色の知覚に対しても重要な役割をもつ場合がある。

2.2. 色彩の多次元性

色彩に備わる固有の空間性に着目するなら、色彩現象を3属性(色相、明度、彩度)のみによって定義する見方は、実際には存在しない色を対象とした性格づけであるということになる。あるいは、一定の空間性を前提したうえでの抽象的な区分であるということになる。

もちろん、表面色、面色などの区分のなかで、どの色彩のあり方を重視するかは、その時々の関心や文脈によって異なるてくるだろう。しかし、わたしたちの日常生活のなかで物体の表面のもつ意義を考えるなら（生態学的現象学の

観点からすると)、表面色と面色の違いは決定的な意味をもつのである。それが顕著になるのは、恒常性が問題になる場面である。

2.3. 色彩の恒常性

物体の表面はつねに他の表面と一緒にになって一定のレイアウトのなかに配置されているものとして知覚され、同時に一定の照明を受けたものとして知覚される。例えば、図2のような凹凸面からなる地形が知覚されている場合、一方では凹凸というレイアウトの知覚がさまざまなパースペクティヴの変化を通して成立すると同時に、太陽光の変化に応じたさまざまな照明の変化を通して同じ表面の色を示すものとして知覚される。つまり、レイアウトとその表面は、その形と色に関して、多様な現れ方の変化を示しながら、同じ形、同じ色とみなされる。このような現象は「形の恒常性」および「色の恒常性」と呼ばれる。

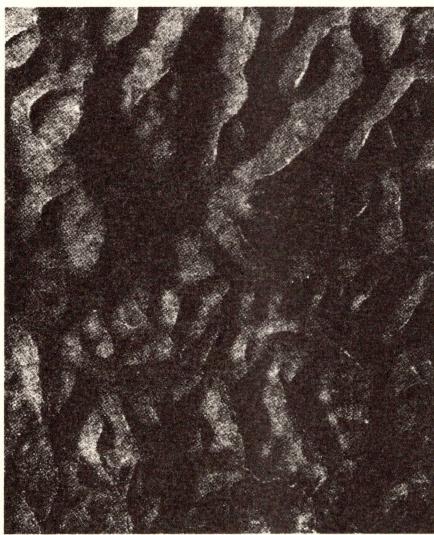


図2：色彩の恒常性 (J・J・ギブソン『生態学的視覚論』1985, p.96.)

ギブソンはこの恒常性の成立を不变項概念で説明する。つまり、形や色に関

して知覚の恒常性が成立することは知覚の基本原理であり、それを支えているのが、変化を通した不变項の知覚というわけである。ギブソンは以下のように述べている。

地上環境の主要な不变項、つまり持続する特徴は、地上の面の配置とこれらの面がもっている反射率である。……

図 5.9 [本論文では図 2] の凸面と凹面の遠近は観察者の異動により変化し、同じく凸面と凹面の陰影は 1 日の時間の経過に伴って変化するが、これらの面の恒常的な特性は、変化する遠近構造と変化する陰影の根底に存在し、そして光学的配列のなかの不变項によって特定されるのである。(ギブソン 1985, 94, 98)

このようなレイアウトの知覚にとって、二つの色の現れ方の区別、つまり、表面色と陰影が作る「色」との区別が重要な意味をもってくる。そして多くの場合、陰影は、面的的な性格を示す。

例えば、図 2 のような凹凸のレイアウトが形成する自分自身の陰の場合、その陰は、決して、表面が灰色に類した色を帯びるようには知覚されない。陰は、表面の色とは区別されている。同じように、ほかのものによって投げかけられた影の場合も同様である。影は、表面を遮蔽するひとつの面のような空間性を示すことはない。このような現れ方の違いがあるからこそ、影のあり方を含み、照明光の満ちた媒質を介した対象の知覚の性格が、表面色の恒常性にとって決定的な重要性をもっているのである。表面の色が変わらずに同じ色であるということを成立させるのは、その色がさまざまな仕方で多様な現れ方を示すからであり、現れ方の多様さは恒常性、同一性を否定したり弱めたりするのではなく、むしろ逆に、恒常性と同一性の成立条件なのである。

表面が同じ色に見えているということは、その色が変わらないひとつの現れ方を不变に保っていることを意味するわけではない。もしそのような不变な現れ方を示すものがあるとすると、わたしたちはそれを通常の物体の色とはみなしえないだろう。影や陰の場合も同じである。陰影があるから恒常性が成り立たないのでなく、逆に、陰影などが投げかけられて現れ方に変化をもたらす

からこそ表面は同じ色をもつ表面色として見てとられるのである。この場合も、「変化すればするほど同じ」という性格が強化されるのである。

ギブソンは恒常性を成立させる条件として、表面の特徴（色）とレイアウトと照明のあり方との相互の不可分の連関を強調して以下のように述べている。

事物を黒、灰色、白と見ることは単純なことではない。わたしたちは、これらの性質が单なる感覚でないことをすでによく知っている。ここで明らかになったのは、それらが、幾何学的空間や太陽光の事実と同じレベルで世界の特徴であることである。これまでの理論が色と光の感覚から出発して空間の知覚へと進んだのに対して、わたしたちは、色と照明と空間を、すべて同じ基盤をもつものとして検知する (detect) という相互に関係する問題から出発する。(Gibson 1966, 215)

2.4. J・コーベンによる色彩の恒常性論

ここで取り上げた色彩の見方の特徴を確認するために、J・コーベンによる色彩の恒常性に関する解釈を批判的に検討してみよう。

コーベンは自らの色彩に関する「関係説」(relationalism) を擁護する文脈のなかで恒常性を取り上げている。

しばしば、恒常性は色が状況に応じて相対的なあり方をするという見方に対してブレーキをかけるための論拠として取り上げられる。確かに色は照明などの変化によって現れ方を大きく変えるが、しかし同時に恒常性現象が示すように、色自体はつねに変化したと見なされるわけではないのだから、必ずしもいつも相対的だとは限らない。むしろ恒常性現象は、色は物体固有の性質であることを示しているのではないか、というわけである。実際、しばしば色彩の実在論を擁護するための論拠にも恒常性が使われる。

こうした考え方に対してコーベンは批判を試みる。

例えば図3のようなコーヒーカップの事例を考えてみよう。

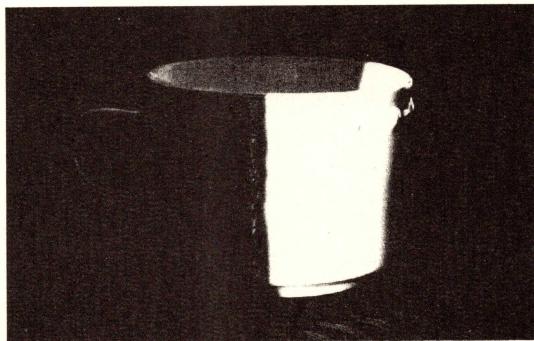


図 3：同時的な恒常性（J. Cohen, *The Red and the Real*, 2009, p.126.）

この事例で、コーヒーカップは半分が照明にあてられており、半分は深い陰のなかにおかれている。ここで知覚者は、一方ではコーヒーカップの二つの部分は違った色を示していると判断をし、他方では、両者は同じ色をしているという判断を示す。この実験データに忠実である限り、前者の判断を否定してしまうわけにはいかない。また、後者の判断を考慮するにしても、同じ色という場合、その色として照明を当てられている色を考えるにしても、陰になつている色を考えるとしても、いずれにしても違いを無視することになり、やはり不合理である。

そこでコーベンは実際になされた判断のみに基づいてでは事態を整合的に判断することはできないと考え、恒常性現象の基礎には、反事実的な条件に関する理解があるという見解を提案する。

ここでコーヒーカップの二つの部分を R1 と R2 とし、それぞれの照明のあり方を I1 と I2 とすることにしよう。ここで、領域 R1 (I1) と領域 R2 (I2) は違った色を示しているが、もし二つの領域が同じ照明のもとにおかれたなら（たとえば照明 I1 か I2 のどちらか）両者とも同じ色を示すだろう、と判断されうる。この解釈によると、恒常性において、知覚者は顕在的な色に関して同じだと判断しているのではなく、少なくとも二つの領域のひとつが異なった照明のもとにおかれたとする仮定の下で判断しているということになる。このように考えれば、知覚者が行う二つの一見不整合に見える判断を整合的に解釈できるとい

うわけである。と同時に、コーベンによると、恒常性の事例は、多様な現れ方のうちの顕在的なひとつの現れ方が特権的位置（本当の色）を占めることを示すものではないということになる。つまり顕在的な色を考慮する限り、色の関係性、相対性は一貫して保持されることになる（Cohen 2009, 53）。

さて、このようなコーベンの解釈はどのように評価できるだろうか。

まず第一に、多様な顕在的な現れのひとつに特権的位置を与えることはできない、という主張は正しいとみなせるだろう。先に見たように、すでにフッサーがそのことを強調していた。しかし、コーベンの議論は、照明現象、およびそれと密接に結びついた陰影現象の意義をまったく考慮していない点で、根本的な欠陥を示している。そもそも、コーヒーカップの二つの領域では、一方が陰のなかにあるのであるから、知覚者が両者を違った色をもつものと見てはいるとしても、それは同じ次元で比較したうえでの違いといえるわけではない。すでに見たように、陰影の「色」は面的性質を示しており、表面色と同じ次元にあるものとは見られないからである。写真に撮ってみれば、そうした違いは明確ではなくなるために、同じ次元で比較できるかのように思われるが、そもそも、写真では照明現象を映し出すことは不可能である。映し出されてしまうと、それはもはや照明の色ではないからである。

以上のように考えることによって、照明現象、そしてそれと対になった媒質の役割の重要さが浮き彫りになってくる。

あらためて確認するなら、媒質内を満たす照明光によって表面色はさまざまな現れ方を示すが、こうした多様な現れ方を通して、同じ色として知覚される。この特徴が射映と呼ばれ、また、恒常性と呼ばれるのである。ここでは多様性や差異性は同一性と相反する契機となるのではなく、むしろ多様性を通してはじめて同一性が経験（「構成」）され、それを通して対象の色は客観的色（超越）として現れる。

この意味で、媒質は、知覚者と対象の間に距離（隔たり）を形成し、それによって「客観的」色を可能にする役割を実現していると考えることができる。したがってまた、この意味で、つまり、超越現象を構成するという意味で、媒質は一種の「超越論的」機能を果たしているといつてもいいことになる。

変化と不变性、依存関係と独立性は決して矛盾する関係にあるのではなく、

変化のなかで初めて不变性が形成され、依存的な関係のなかからのみ独立した客観的な対象が知覚されるのである。こうした不可分な関係性を切り離してしまうと、色彩の恒常性というわたしたちに身近な現象さえ理解不可能になってしまうのである。

3 色と音：空間性と時間性

さて以上見てきた色彩をモデルとした見方はほかの様相に属するとされる感覚現象、たとえば音などにも共通に見られるのだろうか。少なくとも最初に確認した生態学的現象学の観点から見られた知覚構造に関する議論にもとづくなら、特別な違いを見出す理由はないように思われる。

しかしながら他方で、音は色彩とは違ってその時間的性格が顕著であり、この点にもとづいて音の存在を色彩などの感覚的性質とは根本的に違った種類とみなす論者もいる。ここではそのなかの一つの例として、オキヤラハンの音の理論を取り上げて検討することにしたい（O'Callaghan 2007）。

オキヤラハンによると、音は、色などのようにモノに帰属される性質ではなく、むしろ一つの出来事とみなされねばならない。例えば、音は必ず一定の時に始まり、持続し、そして終わりの時をもっており、根本的な時間性を本質としている。それゆえ音は一種の出来事であり、モノや性質とは独立に特定できる個体とみなすべきだというのである。その一つの論拠を以下のように示している。

簡単に言うと、音は持続をもつ。音は始まりと中間と終わりをもつ。さらに、音は時間を通して持続するのみではなく、時間を通して、性質の変化にもかかわらず同一性を保つ。ピッチの変化はひとつの音の終わりではない。壁に色が新たに塗られると、壁の色は変化するが、それとは違って、救急車のサイレンの音の場合には、音が低いピッチから高いピッチへと変化しても、対象はその音を失ったり、次に全く新たな音を獲得したりするわけではない。音は低いピッチの部分と高いピッチの部分をもつことができる。このことが意味しているのは、音源がある時に高いピッチの音を出

し、ある時は低いピッチの音を出しているということとは異なっている。むしろ、ひとつの個体が変化を通して不变にとどまっているのである。
(O'Callaghan 2007, 22 ; 強調は引用者)

たしかにモノの色、たとえば、その表面の色が塗り替えられたりすれば、明らかに色は変化したと見なされる。他方で、救急車のサイレンの音は一定の範囲内であれば、変化を通して同じ音として特定される。

しかしながら、こうした区別は決定的だろうか。

例えば、音の同一性といつても、サイレンの音が途切れ、再び鳴りだしたとすると、それは別の音だろうか。オキャラハンは別の音とみなしているようである。しかしそれでは、サイレンの音が一定のリズムをとって、ある音を鳴らし、中断し、再び鳴らす、ということを繰り返すような仕方で音が出される場合はどうだろうか。中断を含めて同じひとつの音とみなすのではなかろうか。要するに、この場合、一定のゲシュタルト的まとまりが見出しうる限りで同じ音とみなしうるのであり、どの程度のまとまりをもって同じ音とみなしうるかは必ずしも一義的には決まらない。

他方で、色に関しても、通常の物体色ではなく、例えばネオンサインの色のような場合にはその時間性格を見出すことは不可能ではない。例えば、ネオンサインで、一定の間隔で明るさの違った色が連続的に光るようになされている場合、こうした継続的な連続的まとまりを同じ「色」、つまりひとまとまりをなすネオンサインの色とみなすことは必ずしも不可能ではないだろう。少なくともサイレンの音というまとまりの仕方と決定的な区別をつける理由はないようと思われる。

以上の点に加えて以下の2つの点が重要である。

第一に、音といつてもサイレンの音のように個別的な対象が発する音のみではなく、例えば都市のなかでしばしば聞く幹線道路から不斷に聞こえてくる音などのように背景音をなしている場合もある。もちろんこの場合も、音である限り始まりと終わりを考えることができるが、かなり長い時間にわたって（音の）環境全体を規定する役割を果たす場合が多い。

こうした「環境音」は視覚障害者にとって、自分の位置を確認するために重要

な役割を演じことがある。環境内をナビゲートする場合、そうした音を背景にして、個別的な音がそれを遮蔽する仕方などから方向や距離を認知するために役立つことがあるといわれている（佐々木 2001）。

あるいは、ある対象の個別的な特徴を見出すために、たたいて音で確かめるということもある。スイカを叩いてその熟れ具合を確かめることなどは素人なりに行われているが、もっと専門的に、缶詰の中身が腐っているかどうかを叩いて確かめることを職業としている人もいる。こうした場合には、音を聞くことは缶詰が不良品かどうかを確認することにほかならないのである。ちょうど、缶詰の中身の具合を色でもって確認することに対応しており、この場合には、モノの性質を示すものとして音を聞いているということができるだろう（黄倉 2001）。

第二に、これまでの観点から見ると、感覚様相の違いは必ずしも対象の知覚にとって根本的な違いをなすとはいえないことになる。知覚は感覚にもとづくというより、対象の情報を抽出することにあるとすると、感覚様相の違いは情報の違いに決定的な仕方で反映しているとはみなす必要はないことになる。

例えば、火のような対象を考えてみよう。

火からわたしたちは、視覚によって情報を抽出できるが、聴覚によっても、あるいは、嗅覚によっても、さらには熱を感じ取る触覚によっても情報を得ることができる。火という同じ対象が違った仕方で知覚されている。その違いに応じて、色や形、音、におい、そして熱さという多様な現れ方の違いを通して火が知覚されるが、この場合も、違いを通して同じ対象が知覚されている構造は原理的には変わらないのではなかろうか。

この場合、色は最初から火の色、つまり発光色として現れており、音にしても、それは燃焼音として聞かれている。つまり、色といい、音といつても、それぞれが多次元性を備えて現れているのであるから、ここに今度は感覚様相の違いに応じて射映構造と似通った構造を見出すことができる。もちろん、それぞれの現れ方は質的に異なっており、そこで現れている火から得られる情報も全く同じというわけではないだろう。しかし、同じ対象のそれぞれの感覚様相に対応した「側面」の把握という仕方で特徴づけることも不可能ではないだろう。ギブソンの言い方を使うと「この出来事にとって、4種類の刺激情報と

つの知覚システムは等価 (equivalent) なのである。」(Gibson 1966, 54)

もしこのように考えることができるとするなら、音のみを他の感覚的性質から決定的な仕方で区別する理由はないのではなかろうか。

もちろん、以上の例では、火という時間的出来事が対象となっているために、色を通しての知覚と音を通しての知覚で大きな違いは現れない。それに対して、こうした発光色の場合とは違って、表面色の場合には、簡単には音の場合と類比的に論じることはできない。そして、わたしたちの生活のなかで表面色が決定的に重要な役割を演じていることも間違いない。しかしそうした対象のあり方の違いから直ちに色や音の存在論的違いを引き出すことはできないのではなかろうか。

4 存在論的含意：第一性質と第二性質

以上のような検討から、色とは何か、音とは何か、という存在論的な問いに対してどのような答えが得られるのだろうか。

4.1. 関係説と実在論

これまで本論文で検討してきた見方によれば、少なくとも表面色に関していえば、射映構造を通してのみ、あるいは「レイアウト/表面的性質/照明」の関係のなかでのみ、色が現れるとみなされるのだから、この見方は一種の関係説ということができる。ただし他方では、こうした関係を通して（表面）色の固有の客観的同一性、つまりはその「超越的」性格が「構成」されるのだから、実在論ということもできる。奇妙な言い方であるが、カント的な言い回しを利用するならば、関係は「超越論的な」次元を構成しているので、ここで取り上げた関係説は一種の超越論的観念論ということもできるが、他方で、一定の関係のなかで色の客観性が成立するという意味で、一種の経験的実在論ということ也可能である。このような限定された意味ではあるが、生態学的現象学は色や音の実在論を擁護する試みとみなすことができる。

4.2 第一性質と第二性質

すでに見てきたように、生態学的現象学の観点から見る限り、この区別は伝統的な意味では存在しない。

それでは、第一性質と第二性質という区別でいわれてきたことがすべて否定されるのかというと必ずしもそのように考える必要はない。いわば換骨奪胎された仕方でこの区別を解釈しなおすことができる。つまり、二つの性質を存在論的に決定的に異なったものとみなすのではなく、そして、両者に属する性質を排他的に考えるのではなく、むしろ、同じ（感覚的）性質に関して、第一性質的とみなしうる場合と第二性質的とみなしうる場合のあるものとして解釈しなおすことができるようと思われる。

例えば、第一性質のひとつとして取り上げられるモノの大きさを考えてみよう。

大きさに関して、わたしたちは、これは大きい、これは小さい、といった仕方で、その時の関心や情況に応じて区別することを行っている。しかしこの場合の「大きさ」は明らかに主体相対的であったり、状況依存的であったりしている。つまり、この場合には、「大きさ」も第二性質的な特徴をもっているとみなされる。それに対して、間主観的に統一された尺度を決めて、それにもとづいて、対象の大きさを測定し、1メートル23センチなどという仕方で規定すれば、この「大きさ」は対象の第一性質を示すと考えることができる。

同じことが、速度や重さ、あるいは、熱などについてもいいいうだろう。

「今日は暑いですね。」「いやそんなには暑く感じませんよ。」といった暑さ、寒さ、あるいは、涼しさ、などに関しても、このような曖昧な言い方で済ませている限り、第二性質的な特徴を免れない。ところが、ひとたび温度計によって大気の温度を測定することが可能となり、それが一般的に認められるようになると、温度は客観的な数値として確定された性質、「第一性質」とみなされる。たとえば、「今日は28度だった」という言い方で、決着がつけられる。

明るさや色彩に関する同じではなかろうか。

明るさに関する、今のところは、電球の明るさをルックスで表示しているが、照明された部屋の明るさとなると、必ずしも明確な測定がなされているわ

けではない。照度計や輝度計で測られた明るさが、多くの人に受け入れられるようにはまだなっていない。色彩の場合も同様であろう。もしなんらかの仕方で対象の色彩を分光測光器などによって測ることができるようになり、その測定値が多くの人によって色彩のあり方を示すものとして認められるようになると、色彩の場合にも、第一性質的な契機を認められるようになるだろう。「これはわたしには赤っぽい色見えます。」「わたしにはむしろ紫が濃いように見えます。」などの判断に対して、「この色は本当は XXX という値であらわされる色です。」という言い方で決着がつけられることになるだろう。

もちろんこの場合、色の関係性はすべて捨象されるが、どのような捨象のされ方がなされ、どのような契機に着目されるかはその時の科学の水準と、色彩をどのような関心で扱うか、によって変わってくるだろう。

以上のように考えることができるとすると、結局、その都度の科学と技術のあり方に応じて、そして、それを受け入れるわたしたちの生活のあり方に応じて、それぞれの「性質」に対してどのような第一性質的な面をみることができるとかが決まってくるということになる。

この点で、第一性質と第二性質の区別は原理的には、関心相対的、あるいは状況相対的とみなしうるだろう。

もちろんこの場合でも、アリストテレスが指摘していた「共通感覚」としての第一性質という意味合いは一定の意味をもち続けるだろう。そしてその意味でいえば、形や大きさを色や音から一定の仕方で区別することに意味が見出されるだろう。しかしその場合でも、その区別に存在論的な含意を直ちにもたせることができるわけではない。

こうして見ると、第一性質と第二性質という仕方で問題にされてきた存在論的な問いはむしろ、わたしたちがどのような科学・技術を利用し、どのような生活を行っているのかに依存した開かれた問いとみなしうることになるだろう。

文献

黄倉雅広 2001 「打撃士の技——洗練された行為とアフォーダンス」『アフォーダンスと行為』佐々木正人・三嶋博之編、金子書房。

Cohen, Jonathan 2009. *The Red and the Real, An Essay on Color Ontology*, Oxford University

Press.

ギブソン、ジェームス 1985(1979) 『生態学的視覚論』古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬晃訳、サイエンス社。

Gibson, J. James 1950. *The perception of the visual world*, Houghton Mifflin Company.

Gibson, J. James 1966. *The senses considered as perceptual systems*, Houghton Mifflin Company.

フッサーク、エドムント 1979(1913) 『イデーン I-1』渡辺二郎訳、みすず書房。

メルロポンティ、モーリス 1974(1945) 『知覚の現象学 2』竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、みすず書房。

村田純一 2002 『色彩の哲学』岩波書店。

O'Callaghan, Casey 2007. *Sounds, A Philosophical Theory*, Oxford University Press.

佐々木正人 2001 「ナヴィゲーションと遮蔽」『アフォーダンスと行為』佐々木正人・三鳴博之編、金子書房。

(むらた じゅんいち／立正大学)